北國街道の宿場町―木之本宿

木之本町教育委員会生涯学習課
主　査　尾崎　好則

1．はじめに

木之本町は滋賀県の最北部に位置し、「木之本地蔵」で知られる時宗浄信寺の門前町であるとともに中山道と北陸方面とを結ぶ北國街道、北國脇往還の交通の要衝として発展してきました。

現在もその当時の名残として本陣屋敷の一部や街道に添って南北に連続して伸びる町並みを残しています。

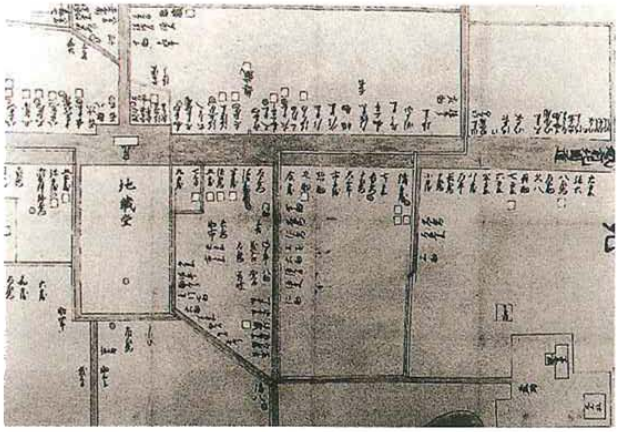
ここでは、浄信寺や本陣屋敷（竹内五左衛門家）に保存されている古文書や関札（宿札）などの資料を中心に旧宿場町木之本宿の往時の状況を略述してみたいと思います。

近世以前の木之本宿

一般に宿場町が急速に発展したのは、江戸時代のはじめに全国の街道を整備し、従来の伝馬制が整えられ、公用人馬継立の問屋場や大名などが宿泊や休息をとる本陣、脇本陣、さらに庶民の宿泊施設としての旅籠屋などが各宿場町に整備されたころと考えられています。

木之本宿の場合も同じように発展して来たと思われますが、一方で浄信寺の門前町としての性格があります。

浄信寺の歴史については、現存する近世以前の資料が少なく、寺伝（縁起）によると「天武朝の時代に摂津国難波江に金色の光を放って漂っていた像を天武天皇の命により薬師寺の僧祚蓮が拾い上げ難波に金光善寺を建立し安置した後、翌年に祚蓮が白山に向う途中に浄信寺の地に霊感を感じて伽藍を建立し、拾い上げた像である地蔵菩薩像をこの地に移し、



木之本町浄信寺門前絵図

安置した。」のが始まりとされています。

浄信寺建立の前には、柳の老木があったことから山号を柳本山と呼んだが、その後に醍醐天皇が菅原道真に命じて祈念させ、山号を長祈山と改めさせ現在と同じく、長祈山浄信寺となると記されています。

なお、祚蓮については、『扶桑略記』中の天武九年（680）11月条の薬師寺建立についてや『薬師寺縁起』などで記述が見受けられますが、祚蓮の存在については平安時代中期（10世紀後半）頃の史料においてのみしか遡れないようです。

一方、美術史の面からは、浄信寺の本尊である地蔵菩薩立像（重文指定）の像内で確認された木札（銘札）に「仁治三年」（1242）の墨書銘があることから、13世紀中頃（鎌倉時代）には既に等身大（像高163.3cm）の堂々たる地蔵菩薩像やほぼ同時期の作とみられる閻魔王立像、倶生神立像などを安置する寺院であったことが推察されます。

さらに現存する重文指定の絹本著色地蔵菩薩像の仏画などや嘉吉二年（1442）の紀年銘

のある獅子牡丹蝶鳥文鏡や慶長六年（1601）の紀年銘が確認できる秀頼寄進の鰐口、擬宝珠、釣灯籠など数十点の作品は、鎌倉から近世初頭まで途切れることなく確認され、各作品とも時代を代表する様な名品揃いであり、まさに湖北地方を代表する時宗の大寺院であったことが窺い知れます。

しかし、この様に多くの寺宝（宝物）を所蔵する浄信寺において、日常の様子や門前の状況を書き表した文書はあまり認められません。現在、行っている浄信寺古文書調査の結果では、現存する約千点の文書の内で98～99％が江戸時代以降の文書であることが分かりました。残り１～２％の内で僅かであるが、中世の門前の状況を窺い知れるのが『浄信寺地帳』です。

『浄信寺地帳』は、天文十四年（1545）に作成された地帳で、浄信寺領（寺領）の経営上の内訳を寺領田・寄進田畑・浅井氏寄進畠・野畠・屋地に分けて記録された土地台帳です。

この寺帳については、既に宮島敬一氏によって詳しく検討され報告されています。

それによると、当時の浄信寺の寺領田は、木之本村（現在の木之本町の中心部）に集中し、寄進田畠が伊香郡内から東浅井郡にかけて広がる平野部に広く認められ、屋地（屋敷地）の記載では11か所の屋地から加地子（二百文の地が６か所、百文の地が５か所）を取っていたことが知れ、地積についての記載はないが、ある程度の地割による町場の形成が想定されると指摘されています。

さらに、「壱所　百文　木戸彦三郎方」にみられる木戸からも町場して整備されていたことが窺われます。

このように中世末期には既に、門前町の形成を想定される浄信寺門前もその後、『信長公記』によると織田信長の浅井氏に対する元亀二年八月（1571）並びに同三年三月の小谷城攻めによる周辺集落への放火や同年七月における周辺地域に点在する寺院（堂塔伽藍）や旧跡の焼き払いでは、木本地蔵坊（浄信寺）も焼かれており、門前も同じく焼き払われたと思われます。

この後、戦国期の幾度かの合戦による直接的、間接的に受けた打撃は浄信寺の復興を遅滞させ、完全に復興されるのは寺宝類などから豊臣秀吉や秀頼の時代であろうと考えられますが、資料的に充分な検討が必要であろうと思います。

近世の木之本宿

近世になり、浄信寺文書である慶長七年（1602）の『伊香郡木之本村検地帳』（延享四年写）からは屋敷合計二町六反余、屋敷は八十筆を数えるとあり、門前あるいは街道に沿って立ち並ぶ町並みが想定されます。

また、当時の人口については、元禄八年（1695）の『大洞弁天寄進帳』によれば北南の両木之本村を合わせて1,345人と記載されています。

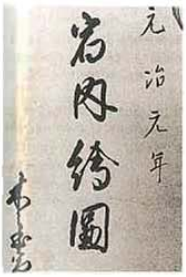
家数については、元禄十一年（1698）の『庄屋十右衛門・同喜右衛門留記』（町内所蔵）によれば、街道に沿って浄信寺門前の札の辻から南には119軒（うち寺１、明屋敷2）、北には74軒（うち明屋敷１）の家があると書かれています。

さらに元文四年（1739）一月と延享元年（1744）三月にあった木之本宿の大火について詳細に記録されている『年々萬日記』（町指定文化財　横井家所蔵）によれば、元文四年「木之本正月廿九日ニ大火、明六ツ二焼出し、同時ニ南北棟数弐百七拾軒余焼申候、尤北ノはし壱町、仁寺。神上・南横町ニはし少相残申候、（中略）地蔵様寺内ハ少不残焼失仕候」

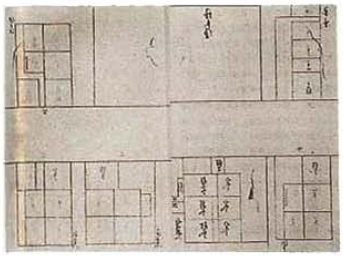
延享元年（1744）「木之本南北、三月十五日之暮合δ大火ニて御座候、南方ハ西側ニ弐軒、東かわニ弐軒、治兵衛家蔵、源太郎家残り申候、（中略）地蔵之内焼ケ不申候、尤此時ハ地蔵堂ハかり家ニて御座候、北方ハ清兵衛書院計やけ、（中略）西かわハ左次兵衛残り申候、右δ北方へハ焼不申候、家数南北ニ百五十六

軒焼失仕候」と記録されていることから、この頃には既に300軒近い家が浄信寺中心に街道筋と周辺地区に立ち並び、街道に沿って160軒余りの町家が町並みを形成していたことをうかがうことができます。

また、街道筋の町家数の増減については、江戸時代を通じてあまり変化がないようで、町内古文書調査で確認した幕末期の本陣資料『元治元年（1864）－宿内絵図』では175余りの戸数が確認できます。



因みに現在の街道筋と周辺地区の戸数は、830戸で人口は2,885人です。


宿内絵図（竹内五左衛門家所蔵）

しかし、街道筋のみの戸数は180余りでほぼ同数であることから、木之本宿が江戸時代から門前町あるいは宿場町として現在まで綿々と続いていることが驚かれます。

街道の往来

続いて、ここからは街道を往来する人々の姿を垣間見たいと思います。

まず、地蔵参りの信者や北陸と近江・京を忙しく往来する行商人の姿や江戸と北陸の各藩の間を宿場ごとに人馬で荷物などをリレーして取り次いで行く中で賑う問屋場の風景やさらにまた、参勤交代で江戸と北陸の諸藩を往復する大名行列などが容易に想像されます。これらを裏付ける資料として現在の木之本の町家や浄信寺に資料（文書）が残されていますが、先にも述べましたように浄信寺と町家に残されている資料（文書）は千点を優に越える膨大な点数からなり、現在調査を続行中で残念ながら充分に読み取れていないのが現状です。

この様な状況の中、数年前に行った旧本陣（竹内五左衛門家）調査で確認された文書や本陣関連資料をとおして往来する大名などの姿をみてみたいと思います。

現在、旧本陣と呼ばれる竹内家は江戸時代をとおして代々本陣を勤めてきた家で、現在の店舗兼住宅に接する家屋（倉庫として使用）は梁などの特徴から木之本宿最古（18世紀前半）の町家の特色がみられます。

現存する本陣文書は約160点、その中で最も古い文書は、元文五年（1740）『柳ヶ瀬関所御番人役ニ付き跡役取極文書』とする柳ヶ瀬関所の番人に関する文書が残されているが、殆どの文書は幕末から明治初期に記されたもので、元文五年以前の文書は恐らく元文四年と延享元年の二回の大火で焼失されたか混雑の中で紛失したのであろうと思われます。これらの文書を詳細に見て行くと明和六年（1769）『松平備後守様御宿割帳』、弘化三年（1846）『有馬日向守様御宿』、慶応元年（1865）『加賀中納言様御下宿帳』や元治元年（1864）「宿内絵図」など大名が宿泊される時に家臣の宿泊場所の割当を記した文書や絵図などが40％で、その他は日常の諸事や年中行事に関することを控えた内容や金の借用や請取に関することが大半を占めています。

次に本陣に宿泊する大名の名前を見て行くと「松平備後守様…」（大聖寺藩主）、「越州様…」（福井藩主）、「有馬日向守…」（丸岡藩主）、「加賀中納言様…」・「加賀宰相中将様…」（金沢藩主）と北陸諸藩の藩主の名が認められます。

さらに大名の宿泊時に本陣の表に揚げられる関札（現存数18枚、平均法量タテ30cm×ヨコ90cm）から大名の名を追ってみると、文書と重複しない藩主名に「酒井若狭守宿」（小浜藩主）、「間部若狭守」（鯖江藩主）の名が読み取れます。

しかし、実際これら以外の北陸の藩主はどうであったかといえばやはり宿泊や休憩場所として当然本陣を利用していたのです。たとえば、木之本から関ヶ原にぬける北陸脇往還

関　　札（竹内五左衛門家 所蔵）

にあった伊部宿（湖北町）の本陣を勤めた肥田家文書の宿割帳から松平、酒井、間部、有馬の北陸諸藩の藩主の名と並んで「土井伊賀守…」（大野藩主）、「小笠原飛驒守…」（勝山藩主）が確認できます。

また、大野藩第六代藩主土井利器の入部（帰国）の行程（東海道から美濃路を経由して北國脇往還、北國街道を通行）を記した『文化八年辛未　利器公御入部帳』によると江戸から大野まで14日間の行程中（実際は浜松付近で川留めにあい２日間費し、16日間掛かっている。）大垣宿（駅）に続いて木之本宿で宿泊しています。

さらに小浜藩第二代藩主酒井忠直の参勤の記した延宝元年八月十一日の『御自分日記』によると小浜を十一日に発駕後、疋田（敦賀市）を経由して木之本宿で宿泊しています。

なお、この時は伊部（小谷）宿では昼食のみでした。

また、大聖寺藩第四代藩藩主前田利章（松平利章）の帰路（江戸から中山道を通り北國脇往還、北國街道を通行）を記した享保八年の『一蓬君日記』によると江戸から追分、妻籠関ヶ原を通り11日目に木之本宿に到着し宿泊をしています。

以上のように石川県から福井県にかける北陸諸藩の殆どは滋賀県での最初の宿泊地として木之本宿を利用しています。

なお、金沢藩の本来の参勤のコースは日本海沿いに北上し、高岡宿・糸魚川宿・高田宿・小諸宿から高崎宿・本庄宿を通り江戸へと向い、交代は逆コースであるが、このコースは天嶮の地が多く、親不知火付近での土砂崩れや海岸近くを通行する時の高波などの影響で通行止めになり、やむなく南のコースを利用したようです。

大聖寺藩においても南北のコースを利用して参勤交代を行ったことが記録に残されています。

おわりに

中世に浄信寺の門前町として発展した木之本宿は江戸時代に入り、近江最北部の宿場町として賑っていたことが大名の往来の記録から確認することができます。

今回、紙面の都合で詳しく紹介をすることができませんが、本陣に伝わる18枚の関札を個々に見ると北陸の大名とは別に豊後岡藩主「中川修理大夫宿」の関札が興味を引きます。これについては、最近、大岩山に建立されている宝塔の銘文をとおして紹介した興味深い論文がありますが、岡藩主中川氏は賤ヶ岳合戦の時に戦死した中川清秀の末裔にあたり、『中川家文書』や『年々萬日記』の記事によると江戸時代をとおして歴代の藩主が浄信寺で法要を行ったり直接に大岩山に登っています。

大名以外の本陣の宿泊者には永平寺禅師や大名家に輿入れする公家の姫君や大名行列の先触れ役とみられる「前田弾番泊」・「長甲斐守泊」（金沢藩家老級）が認められます。

以上、木之本宿の中世から近世の様子について浄信寺や旧本陣資料を題材として駆け足でまとめてみました。

滋賀文化財教室シリーズ No.182号
発行年月日　1998年10月20日
編集・発行　財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-2122 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(077)548-9780 FAX(077)543-1525